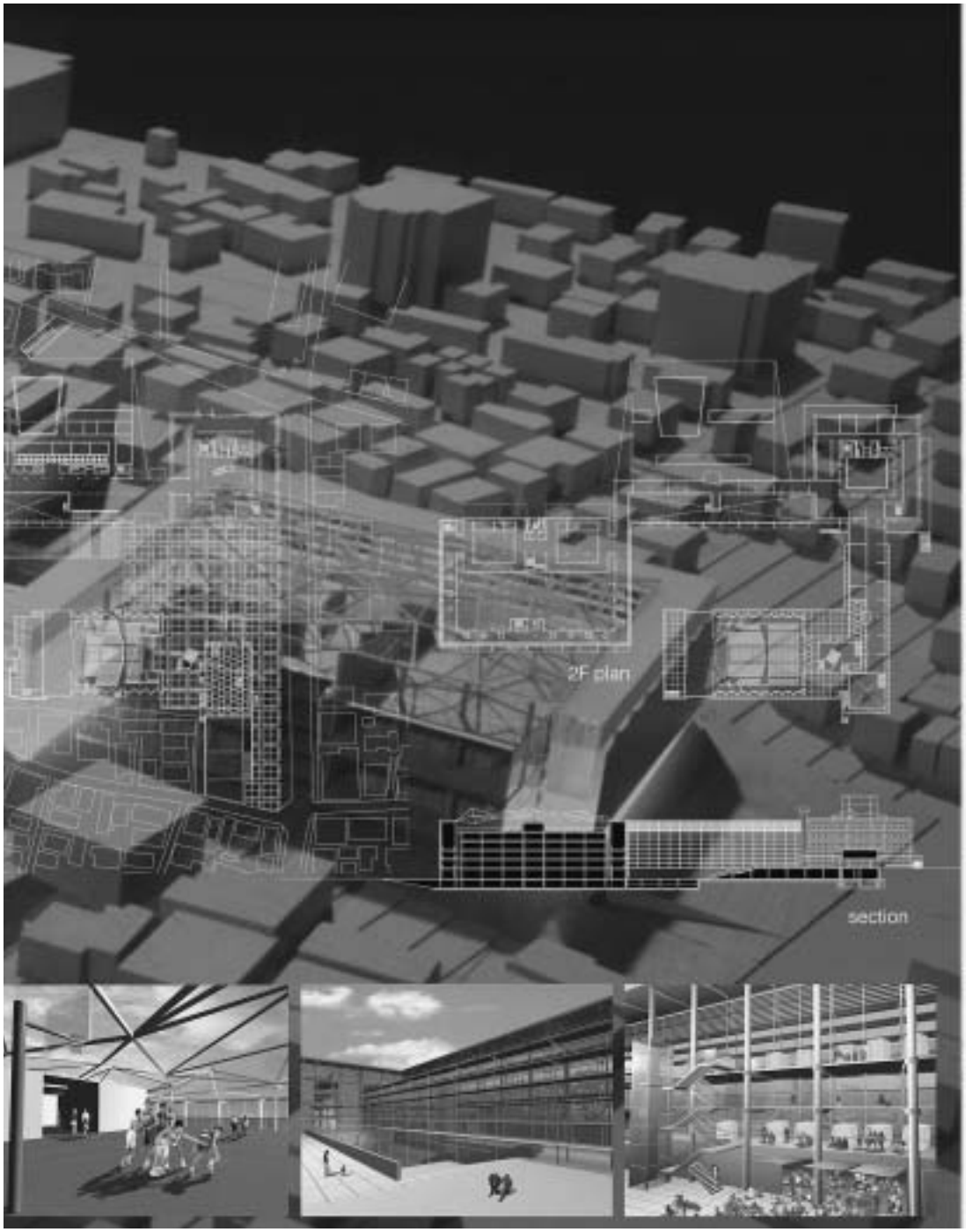
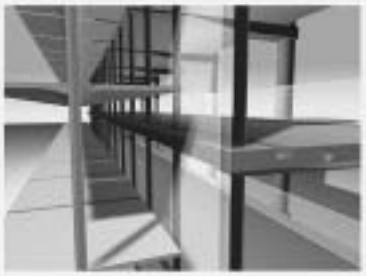
小野　真

修士設計

防災活動拠点としての
世田谷区行政文化ゾーン
の設計

小野　真





小野　真

官公庁施設の多くは、災害時に、様々な防災機能を果たす防災活動拠点としての役割が期待されている。しかし、先の阪神・淡路大震災では、官公庁施設も多くの被害を受け、防災活動等に重大な支障が生じた。構造体に被害がない場合でも、通信・電源設備の被害、ライフラインの途絶により、防災機能が発揮できなかった事例も数多くあった。今後の官公庁施設の整備にあたっては、この教訓をふまえ、より広い視点から防災機能の向上を図る必要がある。

本計画は、前川國男の設計による世田谷区庁舎を中心とする世田谷区の行政文化ゾーンを,災害時において防災活動拠点への転用を可能とする施設として提案するものである。日常の利便性、経済性、効率などを優先し、空間や設備のゆとりや冗長性を無駄なものとして考えるならば、災害時を想定した建築計画と、平常時の建築計画は相容れない。しかし、耐震設計と長寿命設計（長寿命化を目指すほど大きな地震を想定しなければならない）、災害時の機能変換の容易さと空間的ゆとり、災害時の機能維持と自然エネルギー利用等の共通点に着目し、災害時と平常時の建築計画に接点を見いだすことで、防災活動拠点としての性能の向上と、長寿命設計、事務スペースの確保、省エネルギー化といった、現在、世田谷区行政文化ゾーンに求められている条件との合致を図る。

指導＝高宮　真介

近年の庁舎建築においては、タウンホールというような多目的な概念でそのプログラムを考えることはなかなか難しい。行政、議決の機能が高度化するにしたがって、それがブラックボックス化してしまい、建築も余分なものを削ぎ落とし、効率優先の単なるオフィスビルと会議場になってしまっている。しかし本来庁舎建築は、非常時などの危機管理に対応できる複合的なプログラムを想定した冗長性を持つべきであり、特に災害時におけるその役割の重要性が指摘されている。この提案は世田谷区庁舎を取り上げ、そのような防災活動拠点としてのプログラムを並列に設定し、庁舎建築を再構築しようというものである。つまり、平常時のプログラムと災害時のプログラムを対応させ、その転用を可能にする建築を提案している。また既存の区民会館は、築40年を経た前川國男による近代建築の傑作であり、この作品はそれらの保存再生を図るという計画にもなっており、かなりリアリティーの高い提案であるといえる。先の阪神・淡路大震災を教訓として考えるとき、このような建築計画は、これからの庁舎建築のあり方に対する提言として評価されるべきなのではないだろうか。